

# いずれ訪れる両親の死 孤立せず支え合える場が必要

KHJ北海道「はまなす」 田中 敦

「ひきこもり」当事者・家族の声  
誰もが希望を持てる社会を (中)

ひきこもり当事者であれば、いずれ訪れる両親の死。私は昨年5月に85歳の母親を、10月に93歳の父親を立て続けに見送った。まだ死後処理が終わらず続いている日々である。母親はいって元気がなかった。異変に気が付いたのは新型コロナウイルス感染症が始まった2020年頃から。よく家の鍵を失く

すようになり、食材もいつも同じものを購入するようになった。決定的だったのは大切な通帳と印鑑をどこに置いたかわからなくなりひと騒動になったこと。そのころ父親は入退院を繰り返して一人で外出して歩行することが難しくなっていた。ひきこもりケアラーとしての私が「このままではまずい」と困っていたとき、ふと思いついたのが地域包括支援センターだった。あるとき思い切って電話をかけた。これまでの家の状況を話したら、真剣に話を聞いてくれて、数日後主任クラス

の相談員が家庭訪問してくれた。一番の心配事だった母親は知的でプライドも高く、簡単に弱みを見せる人ではなかった。しかし、相談員はそんな母親の自尊心を傷つけないよう「市から言われて地域を巡回している者です」と述べ警戒心を抱かれないよう接してくれ、嫌がっていた病院の受診にも同行してくれた。

## 進行していた母の病

診断名はアルツハイマー型認知症で、かなり進行していることを

毎月4回の月例会「ひきこもり当事者の会」では、カードゲームやトーク、情報交換などをする



## 生きていく証として できる活動は多い

## 生きていく証として できる活動は多い

知症外来に通院し投薬を受けるものの、効果がみえず、結果的に医療保護入院となってしまった。母親としては不本意だったと思う。施設された隔離病棟での生活は母親にとって辛いものだったに違いない。何もできなかった自分は新型コロナ禍で面会は謝絶、ただ入院費を支払うに行くだけだった。

## 突然の両親の死

両親が入院し、その対応に追われるなかで、関係性が強まったのは兄弟とのつながりである。私には7歳年上の実兄がいた。大学を卒業後、企業人として全国各地で仕事を続け定年退職後、札幌に帰り実家近くに住んでいた。心配した実兄が

協力をしてくれて両親の面倒は分担することができた。でもそんな日々も短期間で終わった。母親の死は突然やってきた。入院後次第に食事がとれなくなり衰弱し、点滴の生活だったが発熱しそのまま息を引き取った。父親も人工呼吸器を装着し、そのまま老衰で亡くなった。

死後、手続きは兄弟で行った。葬儀は長男である実兄が取り仕切り、相続に関しては司法書士と税理士に入ってもらい手続きなどをすませた。実家の売却、住み替えも検討したが実兄の残した意向があつて実兄と同居することに解決した。実兄はひきこもりのことはよくわからな

い。ただ言えることは、一人の実弟として見ていてくれたことである。ひきこもり当事者活動をしている収入の少ない私のことを気遣つてか、両親死後た

知らされた。長く親と同居していたにもかかわらず発見が遅れたうえに、ひきこもりで50代にもなつても親に依拠して生きている自分を恥じた。「申し訳ない」という気持ちが強まった。

せめての償いもあつたと思うが、要介護認定後の世話は全面的に行い、食事も自分がつくって食べさせた。幸い私がつくったものは「美味しいね」と喜んで食べてくれた。デイサービスに週4回通い、ケアマネージャーとの定期的な調整や面談も引き受けた。また

寒い雪国特有で起こる階段で滑って転ばないようにと、凍結防止策のリフォームも施した。介護保険で使える社会資源は有効に活用して安心して在宅で過ごせるようにした。

だが、それも長続きはしなかった。父親の慢性心不全が悪化し入院が長期化していくなかで、母親も認知機能がさらに悪化。「誰か知らない人が隣にいる」「誰か私のバックを盗んでいった」など被害妄想が激しくなり、突然包丁を振り回すようになった。在宅介護が難しくなり、認

知症外来に通院し投薬を受けるものの、効果がみえず、結果的に医療保護入院となってしまった。母親としては不本意だったと思う。施設された隔離病棟での生活は母親にとって辛いものだったに違いない。何もできなかった自分は新型コロナ禍で面会は謝絶、ただ入院費を支払うに行くだけだった。

死後、手続きは兄弟で行った。葬儀は長男である実兄が取り仕切り、相続に関しては司法書士と税理士に入ってもらい手続きなどをすませた。実家の売却、住み替えも検討したが実兄の残した意向があつて実兄と同居することに解決した。

実兄はひきこもりのことはよくわからない。ただ言えることは、一人の実弟として見ていてくれたことである。ひきこもり当事者活動をしている収入の少ない私のことを気遣つてか、両親死後た

## 第17回KHJ全国大会

「第17回KHJ全国大会」は、KHJ全国各会が協同して本人と家族、専門家、行政、支援関係者が出会い、つながり、発信していく場であり、「ひきこもり」への社会的理解と支援促進のために学びを深める年一回の

大規模な交流研修会である。申し込み方法はKHJのホームページ、メール (takai2023@khj.com) または FAX (03-5944-5200) で事前申し込みが必要(締切10月下旬)。詳しくはKHJのホームページ参照。

協力をしてくれて両親の面倒は分担することができた。でもそんな日々も短期間で終わった。母親の死は突然やってきた。入院後次第に食事がとれなくなり衰弱し、点滴の生活だったが発熱しそのまま息を引き取った。父親も人工呼吸器を装着し、そのまま老衰で亡くなった。

死後、手続きは兄弟で行った。葬儀は長男である実兄が取り仕切り、相続に関しては司法書士と税理士に入ってもらい手続きなどをすませた。実家の売却、住み替えも検討したが実兄の残した意向があつて実兄と同居することに解決した。